



二 将 軍 柏

中国“四大古樹”



中国河南の地、嵩山の麓に佇む「嵩陽書院」。静寂が満ちるその庭には、樹齢 4,500 年とも称される2本の古柏（コノテガシワの類）が、いまでも青々と葉を繁らせています。歴史をさかのぼること紀元前 110 年、中国全土を治めた漢の武帝・劉徹がこの地を訪れた際に、皇帝の眼に飛び込んできたのは、見事な大木でした。気分を良くした武帝は、その木に「大將軍」（現存）という称号を授けました。ところが、少し歩くと先ほどより遥かに大きな木が現れ、すでに最高位の「大」を使ってしまった皇帝は、困った拳句にそれを「二將軍」（現存）と名付けました。さらに奥へ進むと、それらを凌駕する超巨木と遭遇します。しかし、順番は変えられず、その木は「三將軍」（焼失）にされてしまい、権力者の軽はずみな命名は、巨木の「自尊心」を激しく揺さぶったのかもしれません。

◎特集 交 流 点 描

- 中国の世界遺産を巡る 上海事務所 石川所長
- タイムスリップ 静岡と浙江が歩んだ時代
- 中国が描く未来産業 中核は「具身智能」
- 日中が生んだ奇跡の物語 新城長有と袁隆平が拓いた“ハイブリッド米”

特集：交流点描



～ 草の根交流、確かな信頼へ ～

三島市と麗水市 友好都市提携 30 周年記念訪問記

来年節目となる麗水市との友好都市提携 30 周年を迎える三島市は、今年 8 月 10 日～14 日の 5 日間にわたって訪問団を麗水市に派遣し、両市の友好関係を深めました。両市の深い絆と地域を結ぶ意義深い交流について、同行した三島市関係者からの話をもとにレポートします。

「水と緑」が結んだ 30 年の歩み 両市の交流は、静岡県と浙江省の友好関係を礎として始まりました。当時、麗水市が富士山を望む都市との交流を望んでいたこと、1997 年に「水と緑」という豊かな自然環境の共通点が見出されたことがきっかけとなり、正式に友好都市提携が締結されました。以来 30 年にわたり、中学生や教員の相互派遣、武術や囲碁等の文化・スポーツ交流を通じて、たゆまぬ親善を重ねてきました。今回の 30 周年節目訪問には、鈴木昭彦副市長を団長、平出利之三島市国際交流協会会長ほか 11 名からなる「公式訪問団」と、全日本武術選手権 10 連覇を誇る桐山賢信氏(静岡県中国武術協会理事・自強武術館代表)率いる「武術交流団(29 名)」の二班・総勢 40 名を超える大規模な訪中団が編成され、現地での交流を深めました。



自然の美と先進技術が共存する麗水市の「今」 麗水市は浙江省西南部に位置し、人口 269 万人を擁する亜熱帯気候の美しい都市です。上海から高速鉄道で約 2 時間半の距離にあり、市域の 90%以上を山岳地帯が占めています。浙江省第 2 の河川・瓯江をはじめとする清流が流れ、「麗水」の名に恥じない山紫水明の景観が広がる国指定の「生態モデル建設地区」です。豊富な農業資源に加え、伝統工芸である木工品や玩具の輸出、名高い青田石刻(麗水三宝の一つ)等魅力あふれる産業構造を有しています。更に近年目覚ましいのが IT 産業の躍進です。今回見学した 30 歳の若手社長が率いる IT 企業ではわずか 2～3 年前まで田畑だった場所に高層ビルが急速に立ち並ぶ壮大な景観に圧倒されました。伝統と最新技術が見事に融合するダイナミズムを実感する視察となりました。

医療・行政分野での協定締結と深まる信頼 両市の交流は多分野へ進化を続けています。2017 年の教師交換制度開始を皮切りに、2019 年の観光相互協力覚書、2025 年には「スポーツ文化覚書」と「医療協力覚書」が交わされました。今回の訪問では「麗水市中心病院」を視察しました。敷地内に複数の病棟が立ち並び、3 か所ものヘリポートを備える世界標準の規模と最先端医療体制には大変驚かされました。同病院はアフリカや南米の山岳医療モデルにも指定されている高度な拠点です。その後、麗水市政府を訪問して周和平副市長と会談を行い、今後一層の友好親善と多角的な協力を誓い合いました。

武術と音楽がつなぐ心と心 滞後半は公式訪問団と武術交流団が合流し、麗水市体育館にて「中日武術交流イベント」が盛大に開催されました。会場では中国伝統楽器である二胡と古箏の優雅な生演奏に合わせて、日中あわせて約 100 名の演者による 24 式太極拳の大規模な演武が披露されました。互いの技と日頃の鍛錬の成果をたたえ合う熱気あふれる演武交流を通じて、言葉の壁を超えた深い感動と友情が生まれました。草の根の文化交流こそが両国の未来を照らす真の架け橋であることを再確認する、大変有意義な訪問となりました。



国境を超えて輝く若き才能！

第4回東京国際青少年書画祭、静岡で巡回展を初開催

静岡で東京国際青少年書画祭の巡回展を開催。個性溢れる芸術を通じ、多様な背景を持つ青少年が交流を深めました。

8月20日～23日、県庁別館展望ロビーにて「第4回東京国際青少年書画祭」の静岡友好交流巡回展が開催されました。本書画祭は世界各地の青少年から書画を募り、芸術を通じた国際交流を目指すもので、日本



や中国をはじめ各地から600点を超える作品が寄せられました。静岡からも31点が出品され、7月に東京で展示会を開催。今回は初の地方巡回展として優秀作品102点が展示され、20日には開幕式が行われました。式典では当協議会理事長や県教育委員会教育長より、色彩豊かな作品群の素晴らしさと、困難な時代だからこそ未来を担う青少年交流を育む意義が語られました。東京からも20名以上の青少年が来静・参加し、夏休みに相応しい意義深い地域交流の場となりました。

TECH BEAT Shizuoka 2026

フィジカルロボットの宇樹科技(Unitree)が初出展

TECH BEAT Shizuoka 2026が開催され、国内外のスタートアップが集結。
「フィジカル AI」をテーマに先進技術の展示や講演が行われました。

7月23日～25日、静岡市のグランシップを会場に「TECH BEAT Shizuoka 2026」が開催されました。8回目となる今回は「フィジカル AI」をテーマに、国内外から約150社のスタートアップ企業が出展。独



自技術の展示が行われ、来場者数は15,000人に迫る盛況となりました。会場では、子どもが楽しめる半球型ドームスクリーン体験やeスポーツフェスティバルも催され、多くの家族連れで賑わいました。

今回は特に日本のGMOと事業提携する中国浙江省に拠点をおく宇樹科技(Unitree)が初出展し、二足歩行ロボット2台と四足歩行ロボット1台を披露しました。オープニングでは二足歩行ロボットが軽快なダンスを披露して注目を集めました。同機は滑らかな関節動作が特徴で、可搬重量は約5kg。荷物搬送やエレベーター操作などサービス業への導入が想定されています。一方、四足歩行ロボットは危険地域の

パトロール用として期待され、近年多発する熊出没の監視等を代替することで人命と安全を守るソリューションとして提案されました。

中国はイタリアに次いで世界で2番目に世界遺産が多い国で、既に61件あることをご存知ですか？本シリーズは中でも特にユニークな遺産を深掘りしてご紹介します。

西夏陵 — 正史に編まれなかった西夏王朝

中国西域で登録されたユネスコ世界文化遺産

今回は、2025年7月にユネスコ世界遺産リストに登録された「西夏陵(せいかりょう)」をご紹介します。これは現在の寧夏回族自治区(銀川市)を中心に、チベット・ビルマ語系のタングート族が建国した西夏王朝(1038—1227)の遺跡で、約40平方キロメートルの範囲には、最大約23mの9基の王陵(王の墓)と、271基の臣下・親族の墓が点在しています。

西夏王朝の歴史は、「黄巢の乱」の鎮圧で功績を挙げたタングート族が、唐の皇帝から李姓を賜ったところから始まります。北宋時代に独立を宣言し、チンギス・ハン率いるモンゴル帝国に滅ぼされるまで約190年間の歴史を歩みましたが、中華王朝の「正史」には組み込まれませんでした。



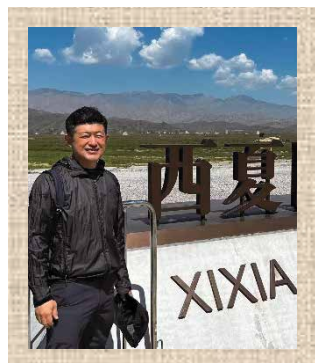
西夏陵で最大級の王陵「3号陵」

この西夏王朝の立ち位置を理解するために、中華王朝の「正史」について簡単に触れましょう。中華の歴史においては、前代の王朝史を編纂することが正統な後継王朝の責務とされ、その系譜を伝える二十四史(『史記』、『三国志』、『宋史』など24の歴史書)が残されています。すなわち、正史とは、正統な後継王朝が自らの正当性を証明するために編纂した歴史書で、その基準には儒教的な正統観が色濃く反映されていました。

当時の正史の編纂を担っていた元王朝は、華北地方で北宋と並び立っていた遼(契丹族)・金(女真族)を正統な王朝として認め、歴史書を編纂した一方で、西北地域で独自の発展を遂げていた西夏の歴史書は編纂されず、他王朝の歴史に断片的にのみ登場する国となりました。

世紀の発見と「謎の西夏文字」

この遺跡が世界から注目されたのは1930年代、ドイツ人飛行士、エーリヒ・フォン・カステル(Erich von Kästner)が飛行中に大小のピラミッド状の墳丘を撮影したのがきっかけでした。現場からは、漢字のような石碑が見つかったものの、この文字に関する記録が残っておらず、その解読は難航します。



県上海事務所
石川祐介所長



西夏文字で書かれた石碑

これを解く鍵となったのが、ロシアの探検家、ピョートル・コズロフ(Pyotr Kozlov)が1908年に数百キロ離れた内モンゴル南部のゴビ砂漠で発見していた文物でした。彼が発見した数千冊の仏教經典の中に、『番漢合時掌中珠』という「西夏語と中国語の辞書」が含まれていたのです。後年、この辞書が研究されることで、西夏文字が漢字の要素を用いて作られた「漢字とは系統を異にする独自の文字」であることが判明しました。1970年代からは本格的な発掘調査が行われ、この遺跡が中華王朝の正史に断片的に記録が残されていた西夏の遺跡だとわかったのです。

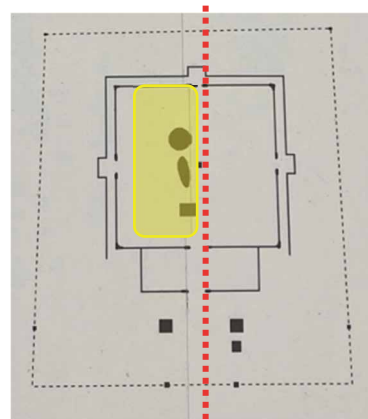
西夏文字と中国語の対比

𐰃 (人)、𐰄 (小)、𐰅 (一)、𐰆 (半)、𐰇 (老)、𐰈 (上)
𐰉 (腰)、𐰊 (禾)、𐰋 (帶)、𐰌 (梯)、𐰍 (勞)、𐰎 (虫)

西夏王朝 独自の中華・遊牧・仏教の融合

西夏王朝は、独自の文字を生み出したほか、唐・宋の伝統を取り入れつつも、遊牧民の生活や仏教の教えを発展させて独自の文明を形成しました。

例えば、西夏陵の巨大な9基の陵墓は、いずれも中軸線からずらして建築されています。これは、研究者の一説によれば、中軸には鬼神が宿るとされ、長安のように「皇帝は天子(神の子)」として、中軸線上に皇居を配置した中国の伝統的な都城計画とは異なる概念を持っていた様子が伺えます。また、いずれも中軸線の西側に陵墓が設置されているのは、仏教の西方浄土信仰と関連付ける見方もあります。



中軸線の西側に遺跡が集中

文明の多層性を現代に伝える

西夏王朝は、中華王朝の二十四史には編纂されませんでした。近年の研究によって、独自の文字、建築、埋葬制度を生み出していたことが明らかとなり、その文明の足跡は「残すべき価値あるもの」として世界遺産リストに登録されました。

私たち人類が学んできた歴史は、程度はあれども各国・地域の視点による「主観」が反映されています。しかし、その視点が変わると歴史は全く違うストーリーになるでしょう。西夏陵は、従来の中華文明における二十四史の枠組みを超えて、多様な文明が実在していたことを、現代の私たちに伝えています。

【現地訪問・アクセス】

最寄空港	銀川河東国際空港(上海から約3時間)
現地交通	同空港からタクシーで約1時間
入場料	68元～(日本円で約1,600円～ ※2026年9月現在)
訪問時期	酷暑・厳冬を避けた春(4～6月)・秋(9～10月)がお勧めです。

タイムスリップ 静岡と浙江が歩んだ時代

— 1982 年の友好提携から 2027 年へ —



第2回 1990 年代：互いを知り、繋がりが深化する時代

1982 年に静岡県と浙江省が友好提携を結んでから、来年で 45 周年を迎えます。この間、両地域の経済関係も時代の波とともに刻々と変化してきました。1990 年代は、バブル崩壊により「コスト削減」や「人件費抑制」が急務となった日本の静岡県企業と、改革開放政策と人民元安を背景に「世界の工場」へと急速に台頭する中国の浙江省が、互いのニーズを合致させて経済的な結びつきを急速に強めた時代でした。

■ 日本：バブル崩壊とデフレ期の到来

1990 年代初頭、地価や株価の急落によって深刻な不良債権問題が発生、「バブル経済」が崩壊しました。景気の悪化に伴い、日本は長い就職氷河期とデフレ時代に突入、企業はより低いコストを求めて製造拠点を海外へと移転し始めます。一方で、PHS や携帯電話の普及、ポケベルブームの到来、更には 90 年代後半の家庭用インターネットの急速な広がりなど、デジタル社会の幕開けとなった時期でもあります。ゲームやアニメといったサブカルチャーが台頭したのもこの時代です。

■ 中国：「世界の工場」としてグローバルに躍動

1992 年、鄧小平による「南巡講話」を契機に、中国は社会主義市場経済へと大きく舵を切りました。改革開放や経済特区の拡大を通じて、外資企業を積極的に誘致するようになります。更に 1994 年の為替制度一本化に伴い、大幅な人民元切り下げが行われました（1 元＝約 30 円から 11 円へ）。この「安く安定した人民元」が中国製品の極めて高い価格競争力を生み出し、日系企業をはじめとする外資系企業の進出が加速、「世界の工場」としての土台が築かれました。

■ 静岡と浙江：経済を中心に、強固なパートナーシップへ

1990 年代、静岡県と浙江省の間では直接的な往来が一段と盛んになり、関係が大きく強化されました。**1991 年：教育支援を通じた交流**/静岡県側、浙江樹人大学に、当時としては大変高価だったパソコン 10 台を寄贈。両地域の友好関係の深化を象徴する出来事となりました。**1992 年：友好提携 10 周年の節目**/浙江省長が静岡県を訪問し、「知事・省長会談」をはじめ、「中国浙江省節」や「輸出商品展示商談会」などが盛大に開催されました。また、交流の節目として「日中経済交流シンポジウム」が開催され、投資環境整備、経済・政策情報の交換、

技術交流、経済ミッション派遣などを目的とした「静岡県・浙江省経済交流促進機構」設立の覚書が交わされました。**1993 年：経済交流促進機構の設立**/前年の覚書に基づき正式に機構が発足し、ビジネス面での支援体制が整いました。**1994 年：大規模代表団の訪問と現地拠点の開設**/静岡県友好代表団 169 名が名古屋空港からのチャーター機で上海や杭州などを訪問。現地政府要人との会談や経済開発区の視察を実施しました。併せて「静岡県駐在員上海事務所」の開所式も行われ、県内企業の中国ビジネスにおけるサポート体制が一段と強化されました。



中国が描く未来産業 「具身智能」

中国政府が掲げる「未来産業」とは、最先端技術によって大きく成長すると期待される新しい産業群を指します。うち「未来製造」は、最先端のデジタル技術、バイオ技術、新素材等を使って、データやスマート設備を製造に取り入れるなど、従来とは異なる製造業のイノベーションを目指します。今中国で特に話題となっている人型ロボットに用いられる「具身智能（エンボディド AI）」は、そもそも実体のない AI を具現化し製造する新概念であると共に最先端技術でもあります。

具身智能（エンボディド AI）から見える「未来製造」

中国政府が推進する「未来産業」とは、最先端技術を活用して将来的な大幅な成長が期待される新しい産業群のことです。その重点分野の一つである「未来製造」は、デジタル技術、バイオ技術、新素材などを駆使し、データやスマート設備を製造工程に取り入れることで、従来の製造業におけるイノベーション創出を目指しています。現在、この「未来製造」の文脈で特に注目を集めているのが、人型ロボットなどに適用される「具身智能



（エンボディド AI / Embodied AI）」です。エンボディド AI とは、画面上や仮想空間内でコンテンツを自動生成する従来の生成 AI とは異なり、物理的な身体（ハードウェア）を持ち、現実世界との相互作用を通じて知覚・学習・行動を行う AI 技術を指します。カメラや各種センサーから得られる視覚・触覚データをリアルタイムで処理し、環境の変化に適応しながら動作を最適化できる点が最大の特徴です。本技術は人型ロボット、産業用ロボット、次世代自動車などへの搭載が進められており、例えばロボットが食材の切り出しや火の取り扱いといった複雑な家事動作を多様な環境下で学習し、自律的に判断・行動する多機能型ロボットの実現に向けた開発が進んでいます。

民間企業による産学連携の拡大（Unitree の事例）

人材育成においては、大学機関だけでなく民間企業の積極的な関与も見られます。エンボディド AI 領域の主要企業である Unitree（杭州宇樹科技股份有限公司）は、2025 年 12 月に青島城市学院と戦略的提携協定を締結し、全国初となる「宇樹科技産業学院」を立ち上げました。同学院では「宇樹イノベーションクラス」を設置し、学生の募集から教育、採用、就職に至るまでを大学と企業が一体となって手掛ける教育モデルを採用しており、産業界の即戦力となる実践型人材の輩出を目指しています。



さらに Unitree は、蘇州における「エンボディド AI 産業学院」の開院や、浙江大学寧波理工学院との「宇樹ロボット産業学院」設立協定の締結、北京の耿丹学院との提携による産業学院の設立など、蘇州、寧波、合肥、アモイ、北京といった主要都市において産学連携プロジェクトを精力的に展開しています。こうした企業参加型の育成エコシステムにより、エンボディド AI の技術普及と日常生活への実用化が加速しています。

新城長有と袁隆平が拓いた“ハイブリッド米”



世界の人口が80億人を超えた今日、「食べる」という当たり前の行為が、実はどれほど脆い基盤の上に成り立っているのか——私たちはいま、その現実を突きつけられています。こうした時代にこそ、一粒の種が世界を変えた物語を振り返る意味があります。沖縄で孤独に理論を磨いた新城長有、そして中国で飢餓と向き合いながら実用化に挑んだ袁隆平という、二人の研究者の情熱が結びつい

て生まれた奇跡の物語がありました。彼らの執念と国境を越えた協力が世界を救った“ハイブリッド米”という革新を实らせました。

第2回 雑草にかけた奇跡 お腹いっぱい未来を夢見た袁隆平

一粒の米に込めた誓い 1930年北京生まれの袁隆平は、農業学校の教師として勤務していました。しかし1960年前後、凄まじい大飢饉が中国を襲います。痩せ細っていく教え子や村人の姿に胸を痛めた彼は、「誰もがお腹いっぱい食べられるように」と、研究のすべてをお米の増産へと切り替えました。

天才的なひらめきと手厳しいしっぺ返し 1961年の夏、田んぼで1株だけ巨人のように大きく実った奇跡の稲を発見します。期待を込めてその種を1千株育てた翌年、実った稲はどれも貧弱で背丈もバラバラでした。落胆した彼ですが、「偶然混ざり合った『ハーフ（雑種）』だからこそ一代目だけ元気だったのでは？」と気づきます。当時の常識を覆し、人の手で理想のハーフ米を作るという着想を得た瞬間でした。

「草を食べるなら大成功」という挫折 ハーフ米を作るには、花粉を作らない特別な母株が必要です。途方もない数の稲穂をひとつずつ検品し、数年がかりで発見。満を持して試作田で収穫したもの、肝心のお米は3%減り、稲わら（草の部分）だけが70%も増えていました。「人間が草を食べるなら大成功だね」と冷やかな皮肉が飛び交い、専門家からも嘲笑されました。

湿地で見つけた「野生の泥くささ」 それでも「理論は間違っていない。足りないのは野生のたくましさだ」と情熱を燃やし、全国の田んぼや沼地を探し歩きます。同じ頃、日本の新城長有が雑種化の理論的仕組みを確立していましたが、大量生産に必要なのは抜群に元気な野生稲でした。1970年、海南島の沼地で弟子が道端の野生稲を発見。袁隆平はこの雑草のような稲を「野敗（やはい）」と名付けました。

奇跡の結晶「野敗」 開かれた未来を目指して、袁隆平はこの「野敗」を掛け合わせることで、圧倒的な生命力と豊かな実りを兼ね備えた「奇跡のハーフ米」が誕生。1973年に成果が発表されると、もはや彼を笑う者はいませんでした。バカにされても泥にまみれ続けた彼の執念は、ついに世界の農業の常識を塗り替えたのです。



発行所：静岡県日中友好協議会 発行人：増井浩二

静岡市葵区追手町44-1(静岡県産経会館1階) TEL:054-255-8111

※「NEWS LETTER」は、当協議会HP (<http://www.japanchina-shizuoka.jp/>) でも閲覧できます。